秀吉時代の大坂城の遺構
唐門・観音堂の見どころ

唐門全景▶

平成25年6月から令和2年4月末まで、およそ7年の歳月をかけて行われた保存修理事業によって国宝唐門は絢爛豪華な彩色が蘇った。その奥に連なる観音堂などとともに、今やここだけに現存する秀吉時代の大坂城の遺構である。その見どころについて、滋賀県文化財保護課 課長補佐の菅原和之さんに伺った。

大坂城極楽橋から移築された建物群

いかにも秀吉好みのきらびやかな唐門は、大坂城の極楽橋（城の北側、京の方角）の一部であり、秀吉の死後、その墓所である京都の豊国廟（ほうこくびょう）（京都市東山区）に移されたものである。

今回、保存修理工事が行われた唐門は、慶長8年（1603）、豊臣秀頼の命により豊国廟から竹生島に移築されたものとされていた。

今回の修理に当たって行われた詳細な調査の結果、唐門だけでなく、観音堂、渡廊（低屋根・高屋根）などの建物群は、その部材の特徴などから同じ大工棟梁によって墨付け（設計）がされたもの、すなわち同時に造られた建造物の一部である可能性が極めて高いことが分かった。豪華絢爛を誇った大坂城の極楽橋を構成していた建築物は、豊国廟を経て竹生島に移築され、姿を変えながらも、新たな命が吹き込まれて、今、私たちの目の前にあるということになる。

▲滋賀県文化財保護課 課長補佐の菅原和之さん

極楽橋の姿を復原する

菅原さんによると、往時の極楽橋の姿は残された史料から想像することが出来る。「ルイス・フロイスなどが記したイエズス会宣教師報告書（1596）には、『極楽橋は黄金に輝き、彫刻で装飾された屋根付きの橋で、屋根の上には二基の小櫓（しょうやぐら）が乗っていた』との記述があります。また、今回行った調査で、唐門の背面には、もともと現在の観音堂のような建造物が付属していたことも明らかになりました」

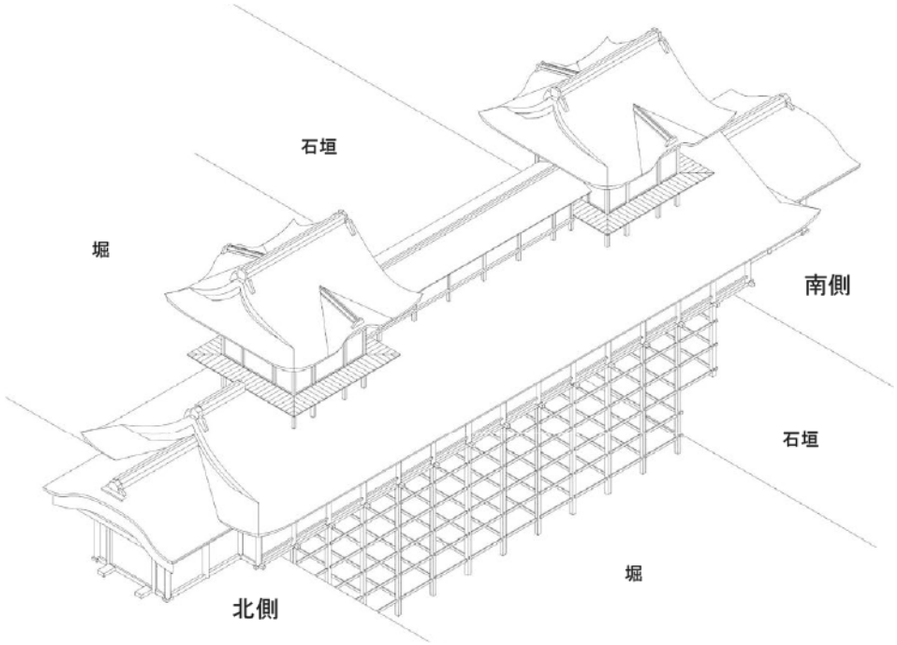

図1　秀吉時代の大坂城極楽橋推定復原図

さらに秀吉時代の大坂城の絵図などをもとに極楽橋の全体像を想像してみると、図1のようになる。で、この復原図から現在の竹生島の建物群を取り出してみると、まず、橋の北側の唐破風（からはふ）の入口が「唐門」に、その背後の建物の一部が「観音堂」に、屋根の上に乗る二つの櫓をつなぐ二階の廊下が「渡廊（低屋根・高屋根）」になったというわけである。

今回の工事では、唐門と観音堂の彩色塗装が復旧された。徳川幕府によって徹底的に破壊されたため、今やここにしか遺されていない秀吉時代の大坂城の往時の色彩が四百年以上の時を越えて鮮やかに甦ったことになる。

王者の象徴「錦鶏」の秘密

改めて唐門を見上げてみる。正面上部にある牡丹の彫刻は鮮やかな群青色の意匠で囲まれている（写真①）。この色の発色には、アフガニスタンでしか産出しないとされるラピスラズリという希少な鉱物（ヨーロッパから見ると海を越えてやってくるので「ウルトラ（越える）マリン（海）」と呼ばれる。その名にふさわしい美しい青色だ）が使われていて、こんなところにも

▲写真①　唐門正面妻飾り

▲写真③　左側の錦鶏（または銀鶏）のアップ

▲写真②　右側の錦鶏のアップ

秀吉の権力が絶大だったことが窺われる。今回の修理に当たっても可能な限り当時と同じ顔料を使ってこの色が再現されたそうだ。なお、ラピスラズリの日本名は「瑠璃」。「瑠璃」に囲まれた「牡丹」と言えば「瑠璃の花園、珊瑚の宮」という琵琶湖周航の歌の4番の歌詞を思い出すが、作詞者の小口太郎がこのことを知っていたのかは定かでない。

「実はこの部分にはもう一つ秘密がありま す。それは二羽の尾長鳥の彫刻なのですが…」と菅原さん。

「通常、二羽の尾長鳥が飾られ、一羽が錦鶏であれば、例えば日光東照宮のように錦鶏と銀鶏が対になるのが一般的ですが、この唐門の場合はちょっと違うのです」

じっくり見てみる。まず、向かって右側の尾長鳥（写真②）は、その形状や彩色の特徴から「錦鶏」と考えられる。一方、左側（写真③）は右側に比べて色落ちが激しかったこともあり、従来は「銀鶏」と考えられていたのだが、それがちょっと違うらしい。

「普通『銀鶏』は『錦鶏』と比べて明らかに色合いが異なり、彩色が地味です。しかし、今回の調査で、左側も『錦鶏』と同様の彩色がされていたことが分かったのです」

錦鶏は中国では王者の冠服の飾りとするとも言われ、いわば王の象徴。派手好きで顕示欲が強かったことで知られる秀吉が、通常の錦銀ペアでなく、あえてダブル錦鶏としたのも分かるような気がする。何せこの唐門のあった極楽橋の北側は京の都からの入口でもあり、自らの威光を示すには最も適した場所だったのだから。

観音様がやや右におられる観音堂

天井の鮮やかな七宝花菱紋（しっぽうはなびしもん）を見上げつつ進んでいくと、奥に長い長方形の建物に入る。ここが千手観世音菩薩の祀られている重要文化財の観音堂である。

ご本尊はお堂の中央に祀られるのが普通だが、観音様はやや奥の方（向かってやや右）におられる。菅原さんによると、かつては正面三間のお堂の中央におられたそうだがそのお堂は焼失。現在の正面五間の観音堂が豊国廟から移築された際に今のような配置になったのだという（図2）。

「観音様は実は以前と同じ石の上におられます。つまり、観音様の位置は変えられなかったのですね。極楽橋の部材をなるべく多く利用したいけれど奥は崖。なので、観音堂は向かって左側（つまり唐門側）に二間分長い形になったのではないかと考えられています。」

そんな話を聞いて観音堂と観音様を見てみると、当時の人たちのいろんな思いや苦労が浮かんできてちょっと感慨深いものがある。

さて、ガイドブックにはあまり載っていない唐門、観音堂の見どころをご紹介してきた。秀吉の没後、時代が徳川の世へと大きく動いていく中で、秀頼、そして淀殿は大坂城を象徴するこの建築物をどんな思いで二度も移築したのだろうか。

「豊臣家の栄華の証を何とか後世に遺したいと思ったのではないでしょうか。竹生島への移築に当たっては、もちろんお寺の復興ということもありましたが、いよいよ京都も危ういと感じていたのかもしれません。そして、淀殿にとって竹生島は親元、浅井家にとって大切な場所ですから。」

秀頼と淀殿が復興なった竹生島の姿を見たという記録は残されていない。しかし、今、時を越え、こうしてまた多くの人の目を楽しませてくれる唐門と観音堂を目の当たりにすると、秀吉の業績を永く後世に伝えたいという二人の願いは十分叶えられたのではないかと強く感じるのである。

（みわのぶひこ）

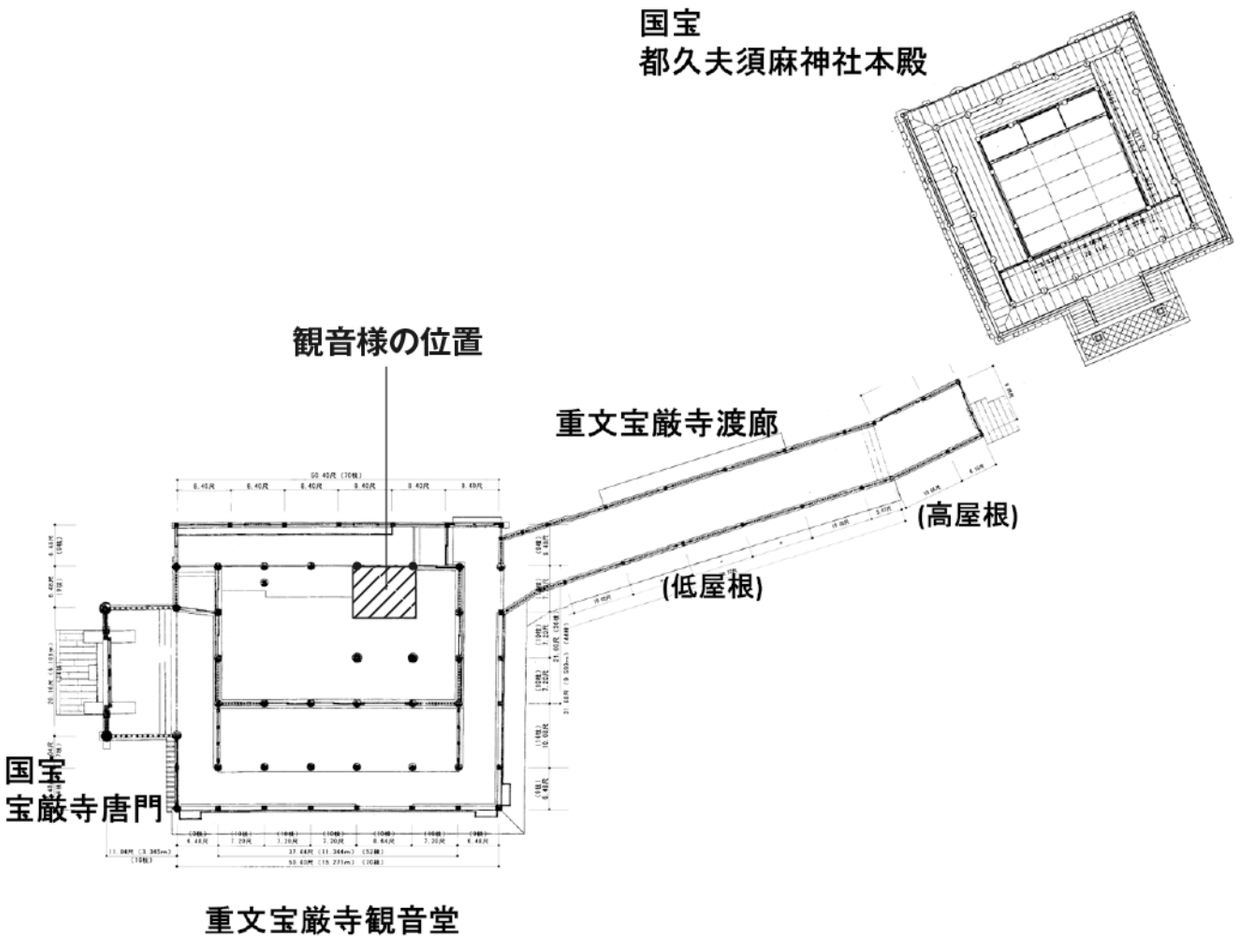

図2　宝厳寺唐門、観音堂、渡廊配置図

写真・図面は『国宝宝厳寺唐門ほか三棟保存修理工事報告書』（滋賀県）から転載